

島根大学教育学部附属学園における
「未来創造科」を軸としたカリキュラム・マネジメント
Curriculum Management based on K-9 Inquiry-Based Learning
in Shimane University Kindergarten and Compulsory School

大谷由香*	中尾祐子*	伊東孝之*
Yuka OTANI	Yuko NAKAO	Takayuki ITO
河角公二*	小川千秋**	森下博之*
Koji KAWASUMI	Chiaki OGAWA	Hiroyuki MORISHITA
竹吉昭人*	猫田英伸***	伊藤優****
Akihito TAKEYOSHI	Hidenobu NEKODA	Yu ITO
加藤寿朗***	深見俊崇***	川路澄人***
Toshiaki KATO	Toshitaka FUKAMI	Sumito KAWAJI

要旨

島根大学教育学部附属学園では、義務教育学校前期課程（生活科と総合的な学習の時間）、後期課程（総合的な学習の時間）の教育内容を、探究活動を軸とする学校設定科目「未来創造科」に集約し、幼稚園での教育活動と関連付けながら11年間を通した一貫カリキュラムとして設定している。2022年度、児童・生徒たちが未来創造科の中で各教科における学びを総合的に活用する機会を充実させることを目指し、全校をあげて「鳥の視点」（カリキュラム全体を外から見渡す巨視的な視点）と「虫の視点」（教育実践を内から記述・分析する微視的な視点）の両面からカリキュラム・マネジメントに取り組んだ。

〔キーワード〕 カリキュラム・マネジメント 探究的な学び 未来創造科

I 学校設定科目「未来創造科」の概略

本校では、総合的な学習の時間の目標を基盤としながら未来創造科の目標を以下のように定めている。目標の詳細な解説については森下ほか¹⁾を参照されたい。

探究的な見方・考え方を働かせ、地域や社会が直面する課題に取り組む未来創造科の学習を通して、創造的な問題解決や未来志向的な構想・提案に携わることで、自己の生き方

*島根大学教育学部附属義務教育学校

**島根大学教育学部附属幼稚園

***島根大学学術研究院教育学系

****広島大学大学院社会科学部研究科

や社会のあり方を考えることができるようにするために、以下の資質・能力を育成する。

- (1) 地域や社会が直面する課題をテーマとした探究的な学習過程において、課題の解決に必要な知識及び技能を身につけるとともに、課題が生じる背景を捉えることができる。
- (2) 地域や社会が直面する課題の解決に向けて問いを立て、その解決に向け、試行錯誤し、探究の成果を地域や社会に対して発信・表現することができる。
- (3) 地域や社会が直面する課題をテーマとした探究的な学習に主体的・協働的に取り組むとともに、互いのよさを認めたり活かしたりしながら、地域や社会の未来を担うための行動を創造的に考え実践できる。

上記の目標記述が総合的な学習の時間の目標と異なるのは主として以下の2点である。

第一は、児童・生徒に「地域や社会が直面する課題」をテーマとした探究的な学習過程を経験させることである。つまり、本科目で児童・生徒に期待しているのは、単に個人的な興味関心に基づいて探究的な学習を行う姿ではなく、現実社会における何らかの問題の解決を志向した探究的な学習に自ら取り組む姿であると言える。別の言い方をすれば、「何を探究するのか」(What)、「どのように探究するのか」(How)のレベルに留まらず、「なぜそのことを探究するのか」(Why)のレベルにおいても、児童・生徒が自律的に考え、判断し、学習に取り組むことができる力を養うことが目指されている。

そして第二は、「探究の結果を地域や社会に対して発信する」ことが学習の前提とされている点である。一般的に探究的な学習においては、「課題設定」、「情報収集」、「整理・分析」、「まとめ・表現」という学習過程が生じる（附属学園ではこの後に「ふり返り・価値付け」という過程を一つ加え、「五つの局面」と定義している）。未来創造科ではこのうちの「まとめ・表現」の相手をできるだけ明確に設定して学習に取り組ませている。これにより、児童・生徒には、①地域や社会の一員として自らにも関わりのある課題を深く理解し、②その解決に向けて探究的な学習を行い、③得られた（得られなかった）成果について責任を持って地域や社会に発信するという一連の探究活動に主体的に取り組むことが期待されている。本学園ではこのような探究的な学習を11年間のカリキュラムにスパイラルに構成することで、子どもたちに地域や社会の未来を担う自覚と、より大きな社会問題の解決に向けて創造的に取り組む資質・能力を養うことを目指している。

以下の表1は2022年度の未来創造科の教育内容の一覧である。紙幅の都合上、各学年における主たる探究課題のテーマのみを示している。各学年では一つのテーマに関連する複数の探究活動を行っている。また、表中に「期」というものが設定されているが、本校では11年間の未来創造科のカリキュラムを学年ごとのステップ（段）として捉えると同時に、大まかな発達段階ごとの「期」というスロープ（坂）としても捉えているためである。なお、未来創造科において児童・生徒を評価する際に参照できる資質・能力表を本学園では作成しており、この資質・能力表の中では「期」ごとに評価規準が設定されている¹⁾。

表1 2022年度の未来創造科の教育内容の一覧

期	学年	時数	○主たる探究課題のテーマ
第五期	9	70	○地域の課題解決を目指して社会に参画する
	8	63	○さまざまな人とかかわりながら住みたいまちについて考える
第四期	7	50	○公民館という施設から地域の公共性を考える
	6	70	○「鳥根の魅力」再発見と発信
第三期	5	70	○「松江の魅力」再発見と発信
	4	70	○身の回りの「ひと、もの、こと」から福祉を考えて意見を持つ
	3	70	○松江の魅力について深く知り、人に伝える
第二期	2	105	○「ひと、もの、こと」と広く出会い、自分とのつながりで捉える
	1	102	○身の回りの「ひと、もの、こと」と触れ合い、くらしを広げる
第一期	幼 2年		○友達と協同（共同）して調べたり、追究したりして遊びこむ
	幼 1年		○「ひと、もの、こと」と出会い、集団生活の基盤を自ら築く

表1から分かるとおり、当然のことではあるが、第一期（幼稚園4歳児，5歳児）の探究課題のテーマは、一見したところでは「地域や社会が直面する課題」を扱っていないことに加え、「探究の結果を地域や社会に対して発信する」こともさせていないように思われるかもしれない。しかし、実際には第一期のテーマにも、本学園の学校教育目標にも関係する「自己理解」，「他者意識」，「社会参画」（自ら進んで他者と関わること）という、探究的な学習に求められる要素が意識的に含まれている。つまり、上で示した未来創造科の目標は、学習指導要領の各教科等の目標と同様、学習の最終段階である義務教育学校9年生の到達目標であり、未来創造科のカリキュラムでは11年間をかけて計画的に子どもたちを目標到達に向けて指導していくことが求められる。本学園では、複数の教員がそれぞれの学年における未来創造科の学習段階を踏まえた一貫した指導を行うことができるように三つのカリキュラム文書を作成している。一つ目は教育内容配列表であり、表1の詳細版である。二つ目は資質・能力表であり、先述したように各期で養うべき資質・能力をスキルベースの評価規準（「～することができる」，「～している」）としてまとめたものである。そして三つ目が、「五つの局面ごとに子どもに期待する姿」の表である。これは教育内容配列表と資質・能力表をつなぐものであり、児童・生徒に各期の探究課題に取り組ませる中で、資質・能力を見取るために注目すべき具体的な行動例を学習過程ごとにループリックでまとめたものである。これら三つの文書によって未来創造科カリキュラムは、園児・児童・生徒を目標に到達させるための指導の流れ・道筋を規定している。これらの文書の関係を端的にまとめると、図1のように図示することができる。

以上が未来創造科の概略であるが、これまでのカリキュラム整備の過程では各教科と未来創造科の関連付けについては深く議論されていない。もちろん、上述の三つのカリキュラム文書を作成する際に、各学年の教育内容やその学年の児童・生徒のおおよその探究スキルが念頭に置かれていたことは言うまでもない。しかし、体系的にどの学年の、どの教科における、どの

ような学習活動が、その学年あるいは直前直後の未来創造科の学習とどのように関連付けられるかといったような具体的な議論は保留されていた。そのため本学園では、2021年度末時点において未来創造科のカリキュラムが一定のまとまりを持った形で整ったことを踏まえ、2022年度に1年間をかけて全校でこの課題に取り組むこととした。その際、①カリキュラムを静的な構造として捉え、全体を外側から共時的に概観する「鳥の視点」(第Ⅱ節 カリキュラム・マネジメント総表の作成)、②カリキュラムを動的な実践の総体として捉え、実践者として内側から通時的に記述・分析する「虫の視点」(第Ⅲ節 第1学年、第4学年、第8学年の未来創造科の授業研究)の両面からアプローチした。

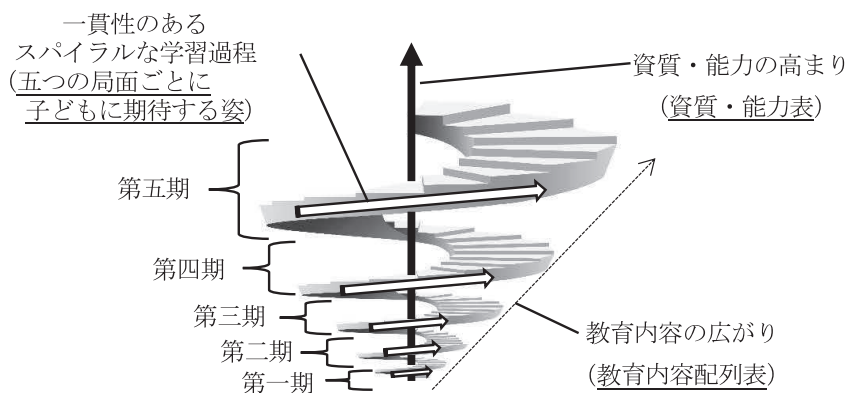


図1 未来創造科のカリキュラム文書3点の関係¹⁾

Ⅱ カリキュラム・マネジメント総表の作成

1. 目標共有 (4月～7月)

2022年度の未来創造科のカリキュラム・マネジメントの取組は本学園の4月の合同職員会議(幼稚園, 義務教育学校の教員, 附属学校部の大学教員が全員参加)において、「学園研究で今年度特に力を入れること」の一つとして以下が示されることから始まった。

○未来創造科を核としたカリキュラム・マネジメント
 研究指定学年の指定 … 授業公開の実施, 実践論文まとめ
 未来創造科教員研修会の開催

(令和4年4月20日 合同職員会議資料より)

その後、5月中旬の学園研究日の研究部資料において、以下の学園研究主題が示され、未来創造科を中心として、保育、各教科まで範囲を広げた形で探究的な学習過程を踏まえた教育活動を推進していくことについて共通理解が図られた。

○令和4年度の学園研究主題

「新しい自分を創る」～探究的な学習過程を踏まえた活動・単元・題材構成の工夫～

○今年度の具体的な研究の視点について

『探究的な学習過程を子ども自ら回していけるようにする手立て』

昨年度、未来創造科では未来創造型探究の学習過程を「課題設定」「情報収集」「整理・分析」「まとめ・表現」「ふり返り・価値付け」と設定し、各学習過程における9年生の子どものゴールの姿を整理していった。(別紙参照)それぞれの学習過程での子どもたちの姿は、言うまでもなく、その場のみで表出されるのではなく、探究的な学習過程の中で、各過程が有機的に繋がり合いながら育まれるものである。

そこで、今年度は、未来創造科や保育各教科において、具体的に探究的な学習過程を設定しながら、それを踏まえた単元・題材構成の工夫を行っていく。その際に、探究的な学習過程を設定するに留まるのではなく、子どもたち自身で主体的に探究的な学習過程を回して行けるような手立てを探っていきたい。保育・各教科において、それぞれの教科の特色や育む資質・能力を踏まえ、場の設定や教師のはたらきかけなど大切にしていきたい点を設定し、授業研究を通して明らかにしていけることで、よりよい授業づくりの視点としてその成果を共有したり、発信したりしていきたい。

(令和4年5月18日 学園研究日資料より)

また同日、後期課程7年生を対象として技術・家庭科(技術分野)の授業(題材名「荷物を置く台がないという問題を丈夫な構造体で解決しよう」)が校内研修会として公開された。その後の研究協議の中では、今年度の学園研究主題が指す「保育、各教科での探究的な学習過程の設定、および子どもたち自身で主体的に探究的な学習過程を回して」行くということがどのような状態であるのかについても確認が行われた。

2. 未来創造科と各教科の一括カリキュラム・マネジメント(7月～11月)

附属研究部内では年度明け当初の4月からカリキュラム・マネジメントをどのように進めるかについて手順の詳細が検討された。その結果、未来創造科カリキュラムの教育内容(Content)と資質・能力(Skill)の両側面について、各教科との関連性を整理する必要があるという結論に至った。以下にその際の一連の議論を端的に例示する。

例えば、前期課程第3学年の未来創造科の探究活動(テーマ「松江の魅力について深く知り、伝える」)の一部として「宍道湖調べ」(10月)が設定されている。そして、第3学年社会科では6月ごろに「しじみ漁の仕事」という単元がある。この場合、教育内容そのものが重なっていることから、前もって社会科と関連付けて未来創造科の指導計画を立てておくことでより深い探究学習を計画できることは明らかである。他方、第3学年国語科では12月ごろに「自分の考えを伝えよう」や「本を紹介しよう」といった単元がある。教育内容の側面で見ると未来創造科とのかかわりは薄い。しかし、未来創造科では10月の「宍道湖調べ」を踏まえて、翌年1

月には児童が国際交流員に対して松江の魅力について発表するという活動が設定されている。第3学年国語科の上記の単元で養う資質・能力を本学園では「自分の考えが相手に伝わるように自分の考えとそれを支える理由を明らかにして文章を書く」と設定している。そうすると、国語科で身につける「自分の考えの効果的に伝える力」という資質・能力は未来創造科の「松江の魅力の発信」という活動に深くかかわることになる。

以上のような議論を踏まえ、7月に学園研究部から各教科部に対して、未来創造科の活動内容を軸とした形で各教科のカリキュラム（扱っている教育内容、養おうとしている資質・能力）を整理するよう依頼を行った。その際に使用したワークシートが以下の図2である。

令和4年度 教科カリキュラム 第8学年 教科【 】			
月	未来創造科の内容	教科の単元・題材 *教科の単元・題材を記入	資質・能力ノスキル(観点別の評価規準) *未来創造科で使えそうな力を記入
4	Chromebookの使い方		
5	ガイダンス 「住みたいまち」について考える① 松江市出前講座①		
6	松江市出前講座② 未来の島根がNO.1 ガイダンス 未来の島根がNO.1 企画書づくり 未来の島根がNO.1 オンライングループセッション		
7	未来の島根がNO.1 プレゼンづくり		

図2 各学年、各教科のカリキュラム整理様式（論文掲載用に一部修正）

得られた記述データは「義務教育学校9年間×各教科」という膨大な量である。初期のデータは一人一人の教員がそれぞれの担当学年の担当教科について書きまとめたものであったため、学年・教科ごとの記述のスタイルには大きなばらつきが認められた。その後、複数回の校内研修が行われ、①教科ごとに義務教育学校9年間を通しての記述のスタイルの統一を行ったり、②教科横断的に記述のスタイルを揃えられる部分を揃えたりするなどして、おおよそ11月ごろには未来創造科を軸として全学年、全教科のカリキュラムを「カリキュラム・マネジメント総表」に整理することができた。図3は、第8学年4月～7月の部分について国語科、社会科、数学科のカリキュラムを関連付けて記述した部分を抜粋したものである。

令和4年度 教科カリキュラム 第8学年								
月	未来創造科		国語		社会		数学	
	未来創造科の内容	教科の単元・題材	資質・能力(特に強い関連)		教科の単元・題材	資質・能力(特に強い関連)	教科の単元・題材	資質・能力(特に強い関連)
4	Chromebookの使い方	1 広がる字びへ			【国】武家政権の展開と世界の動向		1章 式の計算	多問(多様な解法力)・多様な考えの(過程)を認めよう(他者意識)・よりよく返す(問題解決)・詳しく解こう(問題解決)・改訂しよう(問題解決)
5	ガイダンス 「住みたいまち」について考える① 松江市出前講座①	2 多様な視点から 【魅力的な提案をする】 プレゼンテーション		【学知向能力】 【自己意思理解】 【他者意識理解】 【実社会における現狀や背景の理解】	【地】日本の地域的特色	【知技】 人口減少の要因や過疎化が地域に与える影響について理解する力。	2章 連立方程式	
6	松江市出前講座② 未来の島根がNO.1 ガイダンス 未来の島根がNO.1 企画書づくり 未来の島根がNO.1 オンライングループセッション			【思利表】調べたこと、考えたことなどを伝える相手に伝わり、効果的な表現の方法を選び、相手に伝わるように表現する。	【地】日本の諸地域 ○中国・四国地方	【知技】 地域調査を行う際の視点や方法、そのために必要な技能を身に付ける力。	3章 一次関数	【思利表】 表、式、グラフを相互に関連付けて考察する力
7	未来の島根がNO.1 プレゼンづくり	3 言葉と向き合う			【地】身近な地域の調査			

図3 未来創造科を軸とした第8学年全教科のカリキュラム表（一部抜粋：太字筆者）

表1に示したとおり、第8学年の未来創造科の主たる探究課題のテーマは「さまざまな人とかかわりながら住みたいまちについて考える」である。1学期は「未来の島根がNo.1」というタイトルのプレゼンテーションを作成し、学校外の教員以外の大人に対してオンラインで発表させ、フィードバックを受けるという活動を行っている。この活動のねらいは、どれほど突飛な発想でもよいので、とにかく自分自身で「島根を劇的によくする方法」や「島根の良さを県外の人にアピールする方法」を思い描き、そのアイデアを他者に魅力的に伝えるという探究活動を経験させ、社会の一員としてのプレーヤー意識を育てることにある。この活動後の2学期には職場訪問等でさまざまな場所で働く大人たちにインタビューを行うことで、山陰地域が持っている強みや課題、そこに暮らす人々の思い・願いなどに気付き、自分の理想と社会の現実の狭間・折衷点について考えさせるという指導の流れになっている。そして、続く第9学年においてはこの第8学年での経験に基づき、地元企業等に何かしらの問題の具体的な解決案や新しいコンセプトの商品の提案を行うなど、社会参画に向けた活動に取り組む(第9学年の探究課題のテーマ「地域の課題解決を目指して社会に参画する」)。第8学年1学期では、あくまでこのような一連のカリキュラム中の一つの経由点として、あえて生徒自身に「未来の島根がNo.1」について自由に発想させ、現実を無視した夢語りを行わせていることには注意されたい。(もしもこの活動だけで指導を終えてしまっただけでは未来創造科の目標からは遠く離れた教育実践になると言わざるを得ない。)

それでは図3の「未来の島根がNo.1」についてのプレゼン活動と、各教科の教育内容や各教科で養っている資質・能力がどのように関連付けられ得るであろうか。図3では、教育内容、資質・能力の両面で関連が深いと考えられる部分を太字で示している。まず、国語科ではこの時期にプレゼンテーションの方法を指導する単元があり、資質・能力としても【思考力・判断力・表現力等】の観点において「調べたこと、考えたことなどを伝える相手を想定し、効果的な表現の方法を選び、相手に伝わるように表現する」という力が大きく活動に関わってくる。また、社会科の教育内容では、地理分野における学習において中国・四国地方に関する学習が行われている。資質・能力の側面では、【知識及び技能】の観点で「人口減少の要因や過疎化が地域に与える影響について理解する」ことや「地域調査を行う際の視点や方法、そのために必要な技能を身に付ける」ことが目指されている。生徒が、自分の考える「未来の島根がNo.1」のアイデアをどのようにして説得力のある形で相手に伝えるかを考える際の基盤となる知識や技能を指導していると言える。そして、数学科ではこの時期に一次関数を扱う。想像に難くないと思われるが、教科特性もあって算数・数学科は(前期課程の低学年の算数科を除いては)未来創造科と教育内容の面では直接の関連をほとんど持たず、資質・能力の面からの関連が主となっている。例えば第8学年1学期について言えば、数学科の一次関数の学習の中で、「ともなって変わる二つの変数の関係について表、式、グラフを相互に関連付けて考察する資質・能力」(【知識及び技能】)を身に着けることで、実社会の統計データを的確に理解したり、他の人に効果的に示したりすることができるようになることが期待されている。

2022年度、このカリキュラム・マネジメント総表が完成したことにより、少なくとも現時点における未来創造科と各教科の関連については、教育内容、資質・能力の両面から明確に示されたと言えるであろう。これにより、本稿冒頭で述べた、これまで本学園が抱えていた「体系

的にどの学年の、どの教科における、どのような学習活動が、その学年あるいは直前直後の未来創造科の学習とどのように関連付けられるかといったような具体的な議論は保留されていた」という問題は解決された。現在、カリキュラム・マネジメント総表を用いた次年度のカリキュラム改善について議論が始まっている。未来創造科を軸とした全校カリキュラム・マネジメントはこのたびの総表の完成をもって終わるものではなく、むしろこれを基盤とした継続的なカリキュラム・マネジメントこそが求められるであろう。

Ⅲ 第1学年、第4学年、第8学年の未来創造科の授業研究

前節では全学年の未来創造科を広く見渡す「鳥の視点」に立ったカリキュラム・マネジメント（総表の作成）について詳述した。本節では、実践者が1年間の授業実践の中で「虫の視点」から行ったカリキュラム・マネジメント（授業研究）についてまとめる。2022年度は第1学年、第4学年、第8学年が研究指定学年となり、各教科の指導との関連を念頭において未来創造科の授業研究を行った。その成果を、第1学年、第4学年は校内研修会、第8学年は附属学園としての公開研修会という形で共有・発信した。いずれの学年も、既存のカリキュラムにおいて、未来創造科と各教科での指導に関わって課題となっている部分に焦点をあてて指導改善に取り組むというテーマのもとに年間指導計画を立てて授業実践を行い、その成果と課題について協議を行った。なお、ここではカリキュラム・マネジメントにかかわる部分に焦点を絞って論じることとし、研究授業の本時レベルの詳細については取り扱わないこととする。

1. 第1学年の研究授業（11月30日 実施）

（1）探究課題

「わいわいランド」での そら組（年長児）との交流活動を通して 「ひと・もの・こと」との関わりを深めよう

（2）授業構想と探究への手立て（授業者の記述を著者一部改変）

第1学年の未来創造科「わいわいランド」の單元では、「『わいわいランド』でのそら組（年長児）との交流活動を通して、「ひと・もの・こと」とのかかわりを深めよう」を探究課題として取り組む。「わいわいランド」とは、1年生と附属幼稚園のそら組の園児との交流活動であり、本学年の未来創造科の中核として位置づけ、年間を通して取り組んでいる。また、2年生とは、学校探検やさつまいもの苗植えなど、年間を通して交流を深めている。このように、異学年で交流することを通して、1年生は上級生に対して憧れの思いをもっている。「わいわいランド」の際には、自分たちが上級生の立場になるので、そら組のお世話をしようと張り切っている。「わいわいランド」でそら組と交流活動をし、自分たちの関わりをふりかえることを年間を通して続けていく中で、相手の気持ちを考えた関わりをしたり、自分の成長に気づいたりし、次年度2年生として、1年生に関わる自分の姿をイメージできる子になることを願っている。

このような子どもたちの姿をめざし 本学年の未来創造科では探究の過程に添って展開していく。まず「課題設定」の過程では附属幼稚園の園庭で一緒に遊ぶことを通して、「そら組と

なかよく遊ぶためには、どのようにしたらよいのか？」という学習課題を設定する。その際、単元の冒頭である第1回わいわいランドで1年生とそら組の園児を自由に遊ばせるが、第2回以降では1年生2～3人に特定のそら組の園児1人とペアを組ませ一緒に遊ばせるようにしている。これは「そら組と遊ぶ」という言葉を、「自分がペアのそら組の子と遊ぶ」という具体のイメージに引き付けて自分事として考えさせるための手立てである。続いて、「情報収集」「整理・分析」の過程では、様々な場面でのそら組との交流活動において、交流活動とふり返りを繰り返し行っていく。試行錯誤しながらそら組と関わり続けることを通して、自己理解や相手意識の気づきを深めていきたい。次に、「まとめ・表現」の過程では、これまでの学習での気づきを生かして、前期課程入学を控えたそら組を学校に招待し、自分たちの力で交流活動を進めていく。最後に「ふり返し・価値付け」の過程では、1年間の「わいわいランド」での自分の成長をふりかえり、4月から2年生として、新入生をどのように迎えるのかを考える。

(3) 第1学年 未来創造科 (下の○の部分) の全体の流れ (わいわいランド:64時間)

○学校大好き・学校について知ろう

○第1回 わいわいランド (5) ・そら組と幼稚園の園庭で自由に遊ぶ。

[生活科 春みつけ]

[生活科 朝顔を育てよう]

○第2回 わいわいランド (5) ・そら組とペアとをつくって幼稚園の園庭で遊ぶ。

○2年生と一緒にサツマイモを育てよう

○第3回 わいわいランド (10) ・ペアのそら組と前期課程の校庭や体育などで遊ぶ。

[生活科 秋みつけ・秋で遊ぼう (千住院で秋みつけ1回目)]

○2年生と一緒にサツマイモを育てよう

○第4回 わいわいランド (13) ・ペアのそら組と一緒に千住院に秋みつけ (2回目) に行く。

○第5回 わいわいランド (15) ・ペアのそら組と秋のものを使ったおもちゃで一緒に遊ぶ。

○おてつだい

○2年生と一緒にサツマイモを育てよう

[生活科 昔からの遊び・冬を楽しむ]

[生活科 もうすぐ2年生]

○第6回 わいわいランド (16) ・新1年生を迎える会をする。

(4) 活動のふり返し (年度末ふり返し文書<抜粋>) ☆成果と▲課題

☆今年度はわいわいランドを6回実施した。実施回数は年間を通して見たとき適当であり、時間をとって丁寧に、ねらいをもってすすめられた。

☆わいわいランドでは、初回を除き、そら組(1人)と1年生(2～3人)でペアを組んで活動を進めた。常にかかわる対象が決まっていたことで、相手意識をもつことに繋がった。特定の相手がいることでそら組の園児も安心して活動に臨めた。

☆1回目の秋みつけでは、自分自身が楽しみ、自分自身の楽しみを追求していたが、2回目は、そら組が落ち葉や木の実を見つけられるように声がけをしたり、安全に見つけられるように

気を付けたりすることができていた。

☆わいわいランドの回数を重ねるごとに徐々にそら組との仲がよくなり、相手を思う姿が見られた。そら組の園児も1年生の名前を出したり、具体的にふり返ったりできるようになっていった。

▲1年生は、生活科とのつながりもあるので、まずは自分がしっかり楽しむということを大切にしていきたい。夏休みまでは、とにかくそら組と遊ぶ、ふれあいを深める方がその後の関わりや活動への意識が高まっていくのではないかな。

▲わいわいランドのみになるとそら組とかかわる期間が空いてしまうため、そら組と1年生がいつでも関われる環境も必要ではないかな。

研究授業後の協議の場では、第1学年の未来創造科は生活科の教育内容を内包する形でカリキュラムが構成されているため、単元によって指導の焦点が変わることに指導上の難しさを感じるという意見が出された。確かに一方では、第1学年未来創造科の核であるわいわいランドの指導に際しては、子どもたちに「そら組の園児のために」という他者意識を育てることにもっとも注意が払われなければならない。しかし他方、生活科の教育内容である「秋みつけ・秋で遊ぼう」の第1回目においては、彼ら自身が心から秋を楽しむことで学びを深めることが何よりも大切にされなければならない。つまり、本学園の未来創造科では、未来創造科で育てたい資質・能力だけでなく、本来生活科の中で養われるべき資質・能力の育成も保障しなければならないのである。あるいは、生活科の部分の学びが基礎となつてこそ、わいわいランドという未来創造科としての探究的な学習の質が高いものになると言ってもよい。前期課程低学年（第1学年、第2学年）の未来創造科の指導にあたる教員は、他教科のみならず生活科と未来創造科との複層的な関係について理解しておくことが必須であることが確認されたことは重要である。

2. 第4学年の研究授業（11月30日 実施）

（1）探究課題

みんながくらしやすいまちづくりについて考えよう ～ふくし探検隊～

（2）授業構想と探究への手立て（授業者の記述を著者一部改変）

第4学年未来創造科では、福祉に焦点を当て、「みんなにやさしいまちづくりについて考えよう」を探究課題として取り組む。将来的に、人口減少、少子高齢化がさらに進んでいくことが見込まれる松江市において、児童福祉や高齢者福祉、障がい者福祉など様々な福祉の充実に関わる問題は喫緊の課題である。すべての人々の「幸福」を意味する福祉の精神を大切にしながら、さまざまな人々の立場に立ち、だれもが暮らしやすいまちづくりについて考えていくことは、これからの松江市の発展のために非常に重要である。人々の多様性を理解し、福祉の視点から、「みんなにとって暮らしやすいまち」について考え、その実現のために自ら他者、社会に働きかけることができる子どもたちへ成長していくことを願っている。

上記のような子どもたちの姿を目指し、本学年の未来創造科では探究の過程に沿って次のよ

うに展開していく。まず、「課題設定」の過程では、児童たちがイメージする「ふくし」を共有したり、「ふくし」について調べたりする活動を通して、自分たちが探究していきたいテーマを見出し、課題設定を行っていく。次に、「情報収集」の過程では、児童が自分たちの身の回りの「ふくし」についての調査活動を校内や学校周辺で行ったり、さまざまな立場の人と交流したり、車椅子やアイマスクなどを用いてさまざまな立場を実際に体験したりする。「整理・分析」の過程では、収集した情報を比較したり総合したりしながら、誰もが暮らしやすいまちづくりに向けて具体的に考えることができるようにする。最後に「まとめ・表現」では、松江の「ふくし」について実際に行われているさまざまな取組などについて調べるとともに、これまで学習してきたことと関連付けながら「『みんな』が暮らしやすいまち」とはどのようなところなのかを具体的に考え、その実現のためのアイデアを出し合って自分なりの提案にまとめていく。

(3) 第4学年 未来創造科の全体の流れ(70時間+10時間分の異学年交流)

- ・「ふくし」について調べ、課題を設定する。(6)
- ・学校や地域にある「ふくし」を調べる。(18)
- ・さまざまな立場の人と交流したり、体験したりする。(20)
- ・松江市の「ふくし」の取組について調べ、よりよいまちづくりについてまとめる。(20)
- ・「みんな」が暮らしやすいまちづくりについて考えたことを提案し、実践につなげる。(6)

(4) 活動のふり返り(年度末ふり返り文書) ☆成果と▲課題

☆さまざまな立場の方の暮らしやす市の取組等を調べるために、体験や交流活動に多く取り組んだことで、実情や思いについて、より実感をともなった学びにすることができ、「みんなの暮らしやすさ」について多角的に考える力がついた。

☆みんなが暮らしやすいまちづくりについて提案していく前に、松江市の取組や「あいサポート運動」について調べる活動に取り組んだことで、まちづくりについて、より具体的に考える姿が見られた。

☆松江市社会福祉協議会の方と連携しながら学習を進めていったことで、さまざまな方とつながることができ、体験活動や交流活動を、計画的かつ効果的に取り入れることができた。

▲内容について、1年を通して福祉という視点をもってまちづくりについて考える活動に取り組んだが、他の視点からまちづくりについて考える活動もよいかもしれない。

▲カリキュラム・マネジメントについて、福祉と他教科の学習との関連をもたせることが若干難しかった(主なものとしては社会科「郷土の文化・先人たち」単元、国語「調べたことをリーフレットにまとめる」単元)。

▲交流学習の際にどのような方と交流を行うかを考える必要がある。今回は障がい者の方との交流が多かったため、高齢者や児童福祉に携わる方など、より広い視野をもてるような交流の在り方についても検討していく必要がある。

▲今回は「みんなが暮らしやすいまちづくり」について、紙資料で具体的に提案する、という成果発表で終わったが、違ったまとめ方、発信の仕方についても検討の余地がある。

第4学年未来創造科のテーマは「身の回りの『ひと、もの、こと』から福祉を考えて意見を

持つ」と設定されている。上記の研究授業のふり返りの成果の部分を見ると、具体的な交流や体験を通して児童は福祉について考えを深めることができていることから、当初の目標は達成されていると言える。しかし、大きな課題が2点あがっている。第一は、現在の福祉という教育内容は第4学年の段階では他教科の学習と関連付けることは難しく感じられているという点である。そして第二は、探究活動の出口である発信の部分が学習発表に留まっているという点である。これら2点は根底ではつながっている。つまり、現在の福祉というテーマは4年生の児童たちにとっては未だ体験を通して学習する内容であって、発達段階的な面から考えても、他教科の学びを生かして松江市の福祉の課題について自分たちが解決に向けた具体的な行動を計画・実行するということには難しさが伴う。少なくとも現在の70時間という限られた指導時間数の中ではそこまでの指導を行うことには困難があるということは想像に難くない。カリキュラム・マネジメント総表を見ても、福祉というテーマが第4学年の他教科の学習との関連性があまり強くないことが確認されたことから、次年度からの第4学年未来創造科では教育内容の大幅な改善が計画されることとなった。

3. 第8学年の研究授業（11月15日 実施）

（1）探究課題

職場訪問を通して、「住みたいまち」を考えよう

（2）授業構想と探究への手立て（授業者の記述を著者一部改変）

後期課程3年間の未来創造科では、各学年各教科での学習成果を活用し、地域課題の現状分析などを通して、地域を魅力ある「住みたいまち」にするための課題解決を行い、その成果を地域に発信することを目指している。第7学年（中学校第1学年相当）では、第6学年までの学びを踏まえ、「社会を知る」をテーマに地域の公民館の取組を分析・考察する活動を行う。そして第8学年では、「社会と関わる」をテーマに職場訪問を通して地域で働く人々が考える地域の強みと課題について考えていく。その後、第9学年では、「他とともに社会に参画する」をテーマに住みたいまちづくりについて提案したり、活動を行ったりする。

本年度の8年生の未来創造科の取組を、探究の過程に沿って次のように展開していく。まず、「課題設定」の過程では、第7学年で行った公民館の取組を分析・考察した活動や、その活動を通して自分が考えた「住みたいまち」をふり返った。そして、住みたいまちにはどのような条件が必要なのかを考え、子ども、働く世代、高齢者の三つの視点で分類する活動を行った。その後、調査する対象を「地域で働く人々」とし、職場訪問でのインタビュー調査を通して、「職場訪問を通して、『住みたいまち』を考えよう」と探究課題を設定した。「情報収集」の過程では、インターネットでの情報収集や職場訪問でのインタビュー調査を行った。「整理・分析」の過程では、自分が訪問した職場と、班のメンバーが訪問した職場で得た情報を比較したり、関連付けたりして、地域の持つ強みや課題、働く人々の思いなどに分類し、それらを相互に関連付ける活動を行う。「まとめ・表現」の過程では、得られた情報とインタビュー前に自分が漠然と予想していた結果を比較することで課題の背景を捉えなおし、「住みたいまち」づくりにつながる新たな価値（公共的な取組、商品、サービス、広報・セールスなど）を自ら見

い出し、発表会で発信する。発信の対象は主として下級生である7年生とし、ICT機器を使って、聞き手を巻き込みながらプレゼンテーションを行う（この12/8の発表会は第8学年の保護者、地域の教員、大学教員にも公開）。最後に「ふり返り・価値付け」では、今年度の活動をふり返り、活動を通して感じた自他の変化等を客観的に捉え、活動の成果と改善が必要な点について検証する。この一連の活動を通して、自分たちの身の回りの大人や組織が常に「誰か」のために活動していること、またそれによって社会が維持されているということに生徒たちを気付かせたい。それを踏まえて第9学年での社会参画活動での課題設定につなげる。

(3) 第8学年 未来創造科の全体の流れ(52時間+18時間分は平和学習ほか)

- ・第一次 中核的な活動：「住みたいまち」について考える①(4)
自分の住むまちをふり返りながら、「住みたいまち」にはどのような条件が必要かを考え、自分と友達の意見を比較しながら伝え合う。
- ・第二次 中核的な活動：「未来の島根がNo.1」の企画プレゼン・コンペ(13)
県外の人から見た島根についての話を聞き、島根の課題や良さを考える。そして、10～20年後の未来を想像し、島根をNo.1にする企画プレゼンを作り、発表する。
- ・第三次 中核的な活動：職場訪問先でのインタビュー(17)
職場訪問先で働く人たちが島根の課題や強みをどのように捉えているか、どのような願いを持って・どのような想いで働いているのかについて情報を収集する。
- ・第四次 中核的な活動：「住みたいまち」について発表する(15)
さまざまな職場を訪問した他の生徒と情報を共有、整理することで、誰かにとって・誰にとっても「住みたいまち」という概念を捉え、自らの言葉で論理的に発信する。
- ・第五次 中核的な活動：「住みたいまち」にしていくために今の自分にできることを考える(3)
1年間の活動をふり返るとともに、9年生の「住みたいまち」づくりの提案・活動報告プレゼンを聞き、今の自分にもできること・したいことを考える。

(4) 活動のふり返り(年度末ふり返り文書) ☆成果と▲課題

☆職場訪問(インタビュー活動)を行ったことで、「住みたいまち」に迫ることができたり、資質・能力の段階表の地域の課題を見いだしたり、その解決につながる方法を検討したりする力がついた。

☆地元の新聞社である山陰中央新報さんと「未来の島根がNo.1」の活動を職場訪問前に行うことで、島根の強みや良さを考え、それを生かして、職場訪問のインタビューを考える姿が見られた。

☆第二次で、クラス毎に2～3人、10チームに分かれ、Google Meetで東京の外部メンターの方に自分の企画をプレゼンし、ブラッシュアップする時間がとてもよかった。メンターの方がたくさん褒めてくださったり、考えてもいなかったアドバイスをもらえたことで、生徒の自己肯定感ややる気などが向上した。

☆同じ職場訪問先に2回訪問したことで質の高い質問を考えることができた。

☆クラス単位で行う回の「住みたいまち」について考える授業を、クラスをずらして行ったことで、学年部の教員で相互のクラスを見合うことができ、授業内容をブラッシュアップすることができた。

▲今年のように職場訪問を1か所にして、2度訪問するならば、1度目と2度目の間を2週間以上空けるとよい。質問を事前にほしいと言われる事業所があるため。

▲訪問する事業所が、観光関係が多い。もう少し、開拓してもよい。9年生での活動のベースとなるように、もっと職種を広げたい。

▲せっかく8年生で考えた自分の「住みたいまち」のベースや理想があるので、9年生での活動が、活動ありきとなり、活動内容がダウン・グレードしないように配慮したい。必ずしも「すばらしい」提案ができなくてもよいこともしっかり伝え、今、自分が考えている「住みたいまち」を作るためには何が課題で、何が必要かを、9年生のスタートでしっかりと考えさせたい。

上記のふり返りを確認すると、未来創造科と各教科の学習の関連については特にコメントが出ていないことがわかる。しかし、これは各教科の学習との関連を重視していないということではない。著者の一人である大学教員は、各教科で身に着けた資質・能力を生徒たちが未来創造科のさまざまな学習場面で生かしている姿を目にしたという声を、複数の教員から聞いている。また逆に、例えば英語科では、未来創造科での「住みたいまち」についてのプレゼンテーション活動を通して（7月～12月）、2月に行っているFuzoku English Presentation Contest (FEPC) での生徒たちの英語プレゼンテーションの質が（未来創造科導入前よりも）格段に上がっているという報告もある。このことから、後期課程においては未来創造科と各教科の学習はすでに資質・能力の面ではかなり密に関連付けられていると考えられる。むしろ今般、カリキュラム・マネジメント総表が完成したことにより、これまで未来創造科の中で指導されてきたいくつかの内容を教科の学習の中で扱うことなどがすでに検討され始めている（例 職場訪問先でのインタビューや礼状書き→国語科など）。また、後期課程における未来創造科と各教科の間の教育内容の側面での関係についても特に課題は上がらなかった。理由としては、後期課程では教科の教育内容が抽象化し、また未来創造科の活動も個別化してくることから（「住みたいまち」について考える際にも定住施策、産業振興、環境保全、観光コンテンツ開発など、多様な視点・切り口があり、生徒一人一人が扱う内容に幅が出てくる）、ある教科の特定の単元のみが未来創造科と教育内容の面で直接的に関連するというふうには捉えにくいいためである。この点について、後期課程教員は校内研修会などを通して認識を共有できており、現在は課題としては認識されていない。以上のことから、第8学年の授業研究のふり返りでは、隣接する第7学年、第9学年の学習内容との系統性を高めるための具体的な実践上の改善ポイントの指摘が主となっている。

IV 2022年度のカリキュラム・マネジメントの取組の総括

本稿では、鳥根大学教育学部附属学園において2022年度に全校をあげて行った未来創造科を軸としたカリキュラム・マネジメントの取組を報告した。未来創造科は本学園の義務教育学校

における学校設定科目である。そのため、本学園の取組は全国の幼稚園、小学校、中学校等に「そのまま」応用可能ではないと思われるかもしれない。しかし、中央協議会答申（平成28年12月21日）³⁾にも記させているように、国公立を問わず、現在の学校には「教育課程を軸に学校教育の改善・充実の好循環を生み出すカリキュラム・マネジメントの実現」が広く求められている。また、答申では「教育課程全体を通じた取組を通じて、教科等横断的な視点から教育活動の改善を行っていくことや、学校全体としての取組を通じて、教科等や学年を越えた組織運営の改善を行っていくことが求められる」と述べられており、特に以下の三つの側面におけるカリキュラム・マネジメントが重要であるとしている。

- ① 各教科等の教育内容を相互の関係で捉え、学校教育目標を踏まえた教科等横断的な視点で、その目標の達成に必要な教育の内容を組織的に配列していくこと。
- ② 教育内容の質の向上に向けて、子供たちの姿や地域の現状等に関する調査や各種データ等に基づき、教育課程を編成し、実施し、評価して改善を図る一連のPDCAサイクルを確立すること。
- ③ 教育内容と、教育活動に必要な人的・物的資源等を、地域等の外部の資源も含めて活用しながら効果的に組み合わせること。

まさに本学園が2022年度に行った未来創造科を軸としたカリキュラム・マネジメントの取組そのものである。そして、本稿で報告したようなカリキュラム・マネジメントは（義務教育学校でなくとも）小学校、中学校として、（未来創造科でなくとも）「総合的な学習の時間」を軸として十分実施可能であることは明らかであろう。もちろん、カリキュラム・マネジメントは各学校の実態に即して行われる必要があるため本学園の取組が他の学校でそのまま効果を上げるかどうかは分からない。しかしながら、本稿が多くの学校の「カリキュラム・マネジメント」のきっかけとなることを願ってやまない。

謝辞

本稿の執筆に際し、鳥根大学教育学部附属学校園長（当時）常松 浩先生、附属幼稚園長太田 泉先生、附属義務教育学校前期課程副校長 和田律夫先生、附属義務教育学校後期課程副校長（当時）津田昌彦先生には多大なるお力添えをいただきました。ここに記して感謝の意を表します。

参考文献

- 1) 森下博之・鶴原 渡・鎌田真由美・錦織裕介・濱野富由美・河添 達也・御園真史・深見俊崇・香川奈緒美・下村岳人・猫田英伸（2022）「鳥根大学教育学部附属学園における11年間を通じた『未来創造科』のカリキュラム開発」『鳥根大学教育臨床総合研究』21巻，119-213.
- 2) 佐藤 響・大山朋江・大谷由香・森下博之・深見俊崇・猫田英伸・川路澄人（2023）「地

域の公民館の役割から『住みたいまち』を考える—附属学校園 未来創造科 第7学年カリキュラム改善—」『学校教育実践研究』6巻, 77-91.

- 3) 中央教育審議会答申(2016)「幼稚園, 小学校, 中学校, 高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について(答申)」